

『山形県立米沢女子短期大学紀要』第五十一号  
二〇一五年十二月 日刊 別刷

論文

木曾義仲の挙兵と北陸経略について

佐々木 紀 一

# 木曾義仲の挙兵と北陸経略について

佐々木 紀 一

はじめに

寿永二年（一一八三）夏、北陸で平家軍を撃破し、遂に都より平家を退けた殊勲は、関東の頼朝ではなく、木曾義仲を中心とした源氏連合軍であつた。<sup>①</sup>『平家物語』では義仲を、挙兵以降、平家打倒の情熱に燃え、常に戦場で先頭に立つ勇将として描くが、頼朝に比して、入京以前の義仲に関する京都側の史料は殆ど無く、対する関東側の歴史記録『吾妻鏡』に散見する義仲記事についても誤りがある。

義仲麾下として物語に挙げられる武士が『吾妻鏡』<sup>②</sup>他に確認出来る例があり、挙兵の基盤についての分析に利用されるが、義仲の挙兵、経略の経緯を見るに問題が多い。既に浅香年木氏が指摘する様に、<sup>③</sup>養和元年の横田河原合戦直後、義仲が直ちに北陸道を掌握したとする『平家』、及び『吾妻鏡』養和元年（一一八一）九月四日条の、

木曾冠者を為平家追討上洛、廻北陸道、而先陣根井太郎至越前国水津、与通盛朝臣従軍、已始合戦云々<sup>④</sup>

とある記事について、北陸の謀叛は義仲と無関係に発生したもので、義仲との提携は少なくとも時期的に尚早とされる。更に筆者に両書の記事には検討の余地があると見るもので、本稿では批判的に検討して、挙兵から寿永二年の官軍との戦闘までの、義仲の信濃、北陸経略の間

題点を確認したい。

## 一、『平家物語』義仲挙兵の時期とその動機について

義仲の挙兵時期について、覚一本『平家』巻六「廻文」では日付は無い仮置かれるが、治承五年（養和元年）正月の頃の挙兵と理解される。<sup>⑤</sup>直後に、

二月一日、越後国住人城太郎助長、越後守に任ず、是は木曾追討せられんずるはかり事とぞきこえし（巻六「飛脚到来」）

とあるからで、動機は先に挙兵した頼朝に並ぶ為と兼遠に語つてゐる。その後、信濃の根井幸親が義仲を擁立したとするから、それ以前に信濃一国を従へ、父の地盤であつた上野国に入り多胡郡の兵を従へる期間があつたと見る事が出来る。

『平家』諸本を見るに、屋代本・延慶本・長門本・『源平盛衰記』では覚一本同様、挙兵が正月に置かれるが、義仲は平家の世盛りの中から、「先祖ノ敵、平家ヲ討テ、世ヲ取ハヤ」（延慶本三本「木曾義仲成長スル事」、長門本同）と語るから、平家打倒の宿意があつたとする。更に屋代本以外の三本ではそれを平家が聞きつけ、兼遠を召還した後の挙兵となる。長門本は延慶本に近いが、義仲下洛後、反乱の意志を聞

きつけた平家が兼遠を召還したとし、上野の足利一族が味方したとする後に、

さる程に伊豆国流人、兵衛佐むほんをおこして東八ヶ国を管領するよしきこえければ、よしなかもきそのかけはしをつよくかためて、しなの、国を押領す(巻十二)

として、頼朝の関東平定を承けたとする。

『盛衰記』は更に詳細で、義仲は保元平治に源氏が滅びたの聞き、七八歳で既に、

哀、平家ヲ討失テ世ヲ取ハヤト思フ心アリ(巻二十六「木曾謀叛・兼遠起請」)

と復讐を念じて一層武芸鍛錬に励み、平家全盛の頃は叶はなかつたが、高倉宮ノ令旨ヲ給リケルヨリ、今ハ憚ルニ及ハス、色ニ顯テ謀叛ヲ起シ國中ノ兵ヲ駆從ヘテ、既千余騎ニ及ヘリト聞ユ(同前)

とあり、宮の令旨を直接的契機とする。しかし具体的な月日の明示は無く、頼朝挙兵との関係は不明。一方謀叛の動きを聞きつけた平家の義仲誅伐の命に対する中原兼遠請文の日付は治承五年正月とあり、その後、兼遠が滋野行親に義仲を託し、改めて当国隣国の兵を集めたとする。高倉宮の令旨は『吾妻鏡』では頼朝に届いたのは四月二十七日で、『盛衰記』でもその後に甲斐信濃に届いた事になるから(巻十三「頼朝施行」、兼遠の請文は義仲の叛意の発覚から間延びすることになる。

四部合戦状態の挙兵迄の経緯は延慶本・長門本に近いが、治承四年十一月の富士川合戦の後に義仲の挙兵記事が置かれ、先の上野進出が記される。四部本と『盛衰記』を遡る『平家』より引用したと指摘される『保暦間記』では、富士川合戦後、十月二十五日の頼朝の鎌倉立

の次に置かれ、四部本に近い時期となる。<sup>(7)</sup>これによれば義仲挙兵も近江・美濃源氏同様、平家不利の新状況を承けた機会主義的な動機であった可能性がある。

四部本巻四では「令旨ヲ被レ下<sup>(8)</sup>諸国<sup>(9)</sup>」としかされない源行家の令旨伝達先について、四部本を利用すると指摘される真名本『曾我物語』では、頼朝・信太三郎先生に次いで、

超信濃国、多胡先生義賢次男、為始木曾冠者義仲、井上・村上人々、触此由、自是、国々源氏達聞蜂起(巻三)<sup>(10)</sup>

と、木曾以下に言及があり、乱以前に伝達された令旨が諸国の源氏の蜂起を促したとする。<sup>(11)</sup>以上、義仲の挙兵時期について四部本以外は養和元年正月とする点で共通するが、その動機について、頼朝挙兵の影響を挙げる覚一本・長門本と、宮の令旨への呼応を挙げるその他の諸本に分かれる事になる。但し覚一本以外では以仁王の挙兵(治承四年五月)から挙兵(養和元年正月)迄の経過についての義仲の行動について明確でなく、『盛衰記』では更に挙兵の経過が不自然となつてゐる。所が『平家』には別に義仲の挙兵の経緯について記す箇所がある。寿永二年、義仲が山門に送った牒状で、これも諸本で差異があるが、覚一本(屋代本同)では、

(高倉宮が)ひそかに園城寺へ入御の時、義仲先日<sup>(12)</sup>に令旨を給る<sup>(13)</sup>にて、鞭をあげんとする処に怨敵巷にみちて、予参道をうしなふ、近境の源氏猶参候せず、況や遠境においてをや(宮、頼政敗死)令旨の趣肝に銘じ、同類のかなしみ魂をけつ、是にて東国北国の源氏等をのく参洛を企て、平家をほろぼさんとほす(巻七)とあり、挙兵以前に令旨を承けたが、高倉宮の挙兵時には参加せず、宮・

頼政の敗死後、その遺志を継ぎ、或は復讐の為、源氏達が挙兵したとする。これは前掲の義仲挙兵の動機と必ずしも一致しないが、仮にこの文辞が政治的粉飾<sup>(12)</sup>と解すれば可としよう。四部本では、

(宮逃亡) 其時義仲先約成<sup>ヤ</sup>語之上、翌日青鳥頻飛来、有り可<sup>ニ</sup>急参<sup>一</sup>之催<sup>一</sup>

とある「先約」は謀反発覚以前の宮の令旨に応じたと解されるが、園城寺入御の翌日にも別に使ひが来たとするもので、重複感がある。延慶本では、

A 翌日ニ青鳥飛<sup>ヒ</sup>来リ、令旨密<sup>ニ</sup>通<sup>シ</sup>テ義仲有リ可急参<sup>一</sup>ス之催<sup>一</sup>シ、忝<sup>ク</sup>奉<sup>ル</sup>嚴命<sup>一</sup>、欲<sup>シ</sup>企<sup>テ</sup>預<sup>ニ</sup>参<sup>一</sup>之処<sup>ニ</sup>、平家聞<sup>ニ</sup>テ此ノ事<sup>一</sup>ヲ、前右大将、召籠<sup>ム</sup>義仲之乳母夫仲原ノ兼遠之身<sup>一</sup>ヲ、其上重<sup>テ</sup>義仲カ住<sup>ニ</sup>所<sup>一</sup>就人<sup>一</sup>ヲ伺<sup>キ</sup>之ヲ、固<sup>テ</sup>路<sup>ヲ</sup>欲<sup>シ</sup>討<sup>ク</sup>取<sup>リ</sup>ント、雖然<sup>ニ</sup>、義仲捨身命<sup>一</sup>ヲ逃散ス、是京上之初也、而怨敵満國中<sup>ニ</sup>、郎從無相從<sup>一</sup>コト之間、心神迷山野<sup>一</sup>ニ、東西<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>覚<sup>一</sup>往<sup>リ</sup>反<sup>リ</sup>ヲ、未<sup>タ</sup>致<sup>シ</sup>参<sup>ル</sup>洛<sup>一</sup>之<sup>ニ</sup>時、(頼政親子敗死)<sup>B</sup>然者、於平家<sup>一</sup>ニ者、付公私<sup>一</sup>ニ、欲<sup>シ</sup>散<sup>シ</sup>ト会稽<sup>一</sup>之恥<sup>一</sup>ヲ者也、於是<sup>一</sup>、幸<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>下令旨<sup>一</sup>ヲ東山東海之武士<sup>一</sup>ニ、令<sup>テ</sup>決<sup>シ</sup>雌雄<sup>一</sup>ヲ於越後越前之凶党<sup>一</sup>、平家ノ軍兵等、刎<sup>ラ</sup>レ首<sup>一</sup>ヲ終命<sup>一</sup>ヲ之者、不知幾千万<sup>一</sup>ト云コト、今前ノ兵衛佐源ノ頼朝、同義仲等、奉<sup>ヨリ</sup>親王ノ宣<sup>一</sup>ヲ以後、(延慶本三末「木曾送山門牒状事」)

とあり、謀叛発覚後に届いたとする(『盛衰記』は延慶本にはほぼ同じである)。長門本はB以下を欠くのだが、この三本では、イ、宮の令旨は園城寺入御の翌日届けられたこと、ロ、平家が義仲の与同を察知し、兼遠を召還した為、義仲は逃亡し、敵対勢力が多く参洛出来なかつた事となり、更に延慶本・『盛衰記』では、ハ、挙兵の動機は宇治

川合戦の後、「親王ノ宣」をも受けた事を契機とするから、義仲の挙兵は、宮の園城寺逃亡後届いた令旨と、宇治川で戦没した筈の宮の「親王宣」に依ることになる。これは以仁王の令旨が謀叛発覚以前に頼朝及び諸国の源氏に下されたとし、宮の生存説に全く言及しない『吾妻鏡』や覚一本『平家』と異なる。ために長門本は不都合としてB以下を取り除いたものと推定されるが、前掲の挙兵記事と一致しない事となる。

以仁王の令旨については、『愚管抄』の、

三条宮寺二七八日オハシマシケル間、諸国七道ヘ宮ノ宣トテ武士ヲ催サル、文ドモヲ、書チラカサレタリケルヲ、モテツギタリケルニ、(中略)コノ頼朝、コノ宮ノ宣旨ト云物ヲモテ来リケルヲ見テ、サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲトテ、心オコリニケリ(巻五)

によれば、到着は園城寺逃亡後であり、また宇治川合戦後にも「最勝親王宣」なるものが流布し、現実に効果のあつたと諸氏が指摘する<sup>(13)</sup>。また傍線は対句表現であるが、越後は城氏を指すとしても越前の凶党が不明で、本牒状が当時の作成か不安が残り、そこに記される義仲挙兵当時の経緯の当否は不明とせざるを得ない。結局、頼朝との競合を強調する覚一本を後出とするとしても、義仲の挙兵時期と直接的契機について『平家』は区々で、何れが古態で歴史的に正しいか決し難い。

## 二、『吾妻鏡』の義仲の挙兵と問題

所が物語では明確にならない義仲の挙兵時期及び動機について、『吾

妻鏡』治承四年九月七日条の記事が説明する。

①源氏木曾冠者義仲主者、帶刀先生義賢二男也、義賢、去久壽二年八月、於武藏国大蔵館、為鎌倉悪源太義平主被討亡、于時義仲為三歳嬰兒也、乳母夫中三権守兼遠懷之、通于信濃国木曾、令養育之、成人之今、武略稟性、征平氏、可興家之由有存念、而前武衛於石橋被始合戦之由、達遠聞、忽相加欲顕素意、爰平家方人有笠原平五頼直者、今日相具軍士、擬襲木曾、々々方人村山七郎義直、并栗田寺別当大法師範覚等聞此事、相逢于当国市原、決勝負、両方合戦半、被已暮、然義直箭窮頗雌伏、遣飛脚於木曾之陣、告事由、仍木曾率来大軍、競到之处、頼直怖其威勢逃亡、為「加」城四郎長茂、赴越後国云々

と、頼朝の八月二十二日の石橋合戦を聞き、義仲が挙兵を企図したとし、それに対応した笠原頼直と九月七日に合戦があつたとする。<sup>(16)</sup>

①の義仲の前半生部の伝記は、『平家』では母、または斎藤実盛、畠山重能が孤児義仲を兼遠に託したとあり、『平家』と一致しない点があるが、これは『吾妻鏡』の敷衍とされる。然るにその後、傍線部を見るに、石橋山合戦を聞き、挙兵を決意した所、笠原頼直が義仲を襲撃しようとした為、村山義直・範覚等が応戦し、義仲は「大軍」を率し、村山等を助けたとあるのが物語に見えない独自記事である。『吾妻鏡』に於いては義仲の挙兵と以仁王の乱の関係は不明であるが、頼朝挙兵を受ける点では、『平家』諸本では覚一本に近い事になる。

次に『吾妻鏡』同年十月十三日条には、その後の動静について、

②木曾冠者義仲尋亡父義賢主之芳躅、出信濃国入上野国、仍住人等漸和順之間、為俊綱雖煩民間、不可成恐怖思之由、加下知云々

と、父の地盤の上野国に入つたとするから、四部本に時期が近接する事になる。次いで十二月二十四日条に、

③木曾冠者義仲避上野国赴信濃国、是有自立志之上、彼国多胡庄者、為亡父遺跡之間、雖令入部、武衛権威已輝東関之間、成帰往之思、如是云々

と、頼朝の覇権が関東で確立した事を承け、信濃へ帰還したとある(『平家』には見えない)。上野はこの時点で頼朝の支配権下に入つたことになる。<sup>(18)</sup>

『長野県史』五七頁では先の市原を長野市の市村に比定し、延慶本『平家』の後の木曾の回想に、

義仲年来何度ノ軍カシツル、北国ハ信乃ノ小見会田ノ軍ヲ始トシテ、北陸道ニハ、黒坂・塩口・横田川原・安高・篠原・砥波山(四「木曾可滅之由法皇御結構事」)(覚一本もほぼ同)

とある、小見・会田が東筑摩郡に同名が残るとして、九月七日以前に木曾を出て、国府を制圧し、東筑摩郡に出た後、市原の合戦があつたと推定し、菱沼氏は義仲進撃の過程とは見てゐないが、木曾での挙兵とする『盛衰記』巻二十六「木曾謀叛」ではなく、①が史実を伝へると理解されてゐる。<sup>(19)</sup>

確かに村山七郎義直は後述の様に『吾妻鏡』に見え、栗田別当範覚も『尊卑分脈』・『戸隠山顕光寺流記』<sup>(20)</sup>で信濃村上氏出自の「戸隠別当」「栗田禅師」の寛覚に比定される人物で、敵対した笠原平五頼直は、『平家』に依れば治承四年五月の宇治川合戦に、

信濃国住人吉田安藤馬允・笠原平五・常葉江三郎ヲ始トシテ二百余騎進出テ戦ケルニ、常葉江三郎、内甲射サセテ引退ク(『盛衰記』



卷十五「宇治合戦」<sup>(2)</sup>

と平家方として見え、『吉記』養和元年四月十日条によれば、平家の推挙により任官してゐる。<sup>(23)</sup>『平家』の一部伝本（延慶本・長門本・盛衰記）が詳述する養和元年七月頃の横田河原合戦では、城四郎の先鋒として見え、『盛衰記』ではそこで「昔ハ信濃国住人、今ハ牢人笠原平五頼直」（卷二十七「信濃横田原軍」と名乗るから、①の越後逃亡に符合するが如くである。但し笠原頼直がこの時点の敗北で、越後に逃亡し、当時の当主城太郎ではなく、城四郎を頼つたとある記事には説明が必要であらう。平泉佐由子氏が紹介する後世の『高遠記集成』（『新編信濃史料叢書』八）には笠原平五と城氏が一族であるとするが、根拠不明で、近世の付会として良いが、後掲する如く、特に城四郎が治承四年十一月頃、兵糧徴収を行つてゐる事からすると、同人が信濃侵攻を担ひ、笠原頼直との接点があつたとすれば可である。

しかし問題は端的に①の不審は九月七日の時点の挙兵にある。頼朝が石橋山合戦の敗北後安房に渡つたのが八月二十八日で、上総介・千葉常胤が頼朝の元に参陣したのが、九月六日・十九日条である（以上『吾妻鏡』）。情勢が未だ流動的で、坂東でも平家方との戦闘が行はれてゐた時期に、更に日付は遡つてそれ以前に義仲が「大軍」を準備出来ただらうか。「大軍」は言葉の綾として、義仲は頼朝の挙兵を聞き、勝算は度外視して挙兵したとしても、村山義直の如き小規模な武士の独自の挙兵は冒険的で早過ぎないか。

『史料綜覧』治承四年九月七日条<sup>(24)</sup>では、義仲の挙兵を『吾妻鏡』に従ひ、九月七日とし、『玉葉』九月十三日条の、筑前守貞俊来、罷入東国追討使之中、来廿二日可発向云々、信乃

国已与力了

とある傍線部を義仲挙兵と解する。又『六代勝事記』にも、頼朝が、甲斐信濃両国の源氏等をかたらひて謀叛をたくむに、大庭の三郎・平家の重恩を報ずる心ざし不浅、石橋の山にせめた、かふに<sup>(25)</sup>とあり、詳細は記されないが、挙兵前に信濃源氏と連絡があつたと解する事が出来る。

これが風聞、或は後の編纂記事である事は措くにしても、信濃の反乱が必ずしも義仲の挙兵を差すと云へない。『吾妻鏡』九月八日条では、北条殿為使節、進発甲斐国給、相伴彼国源氏等、到信濃国、於帰伏之輩者、早相具之、至驕奢之族者、可加誅戮之旨、依含嚴命也とあり、同十日条では、

甲斐国源氏武田太郎信義・一条次郎忠頼已下、聞石橋合戦事、奉尋武衛、欲参向于駿河国、而平氏方人等在信濃国云々、仍先発向彼国

として、平家方の伊那郡大田切郷の菅冠者自害を記し、諏方社に所領を寄進し、

其後於平家有志之由風聞之輩者、多以令糾断云々として、同十五日条に、

武田太郎信義、一条次郎忠頼已下、討得信濃国中凶徒、去夜帰甲斐国

としてその時、北条時政と遭遇したとある。これからすると甲斐源氏が頼朝と連携し、早い時期に挙兵し、信濃に侵攻した事になるから、<sup>(26)</sup>『玉葉』の記事は甲斐源氏のこの時の行動を指す可能性があり、義仲の挙兵をこの時期と断言する事は出来ない筈である。

### 三、村山義直の動機

治承四年八月の頼朝挙兵から、十月末の富士川合戦迄の信濃の確実な情勢を明らかにし難く、甲斐源氏のこの時期の信濃進出も厳密に言つて『吾妻鏡』以外に確認出来ないものであるが、抑も不審が多いとした③記事の成立と関連するのが、次の『吾妻鏡』の記事であると筆者は考へる。

④ 村上七郎源頼直本知行所、今更不可有相違之由被仰、其書様、村山・米用、件所如本可為村山殿御沙汰云々、是武衛安否未定之時、運懇志、以戦于城四郎等之功、於事被優恕云々（養和元年五月十六日条）

とあつて、本文に不安があるが、後掲『尊卑分脈』にも、村山・米用を頼朝に安堵されたところから、村山七郎義直として良い。然るに養和元年五月の段階で信濃の領知を頼朝が安堵出来るか問題ではないか。更に傍線の頼朝の「安否未定之時」は治承四年八月の石橋山合戦敗北から、上総介の大軍を麾下に収める九月（『吾妻鏡』十九日条）迄の時期である。当然時期からすると、先の市原合戦との整合が改めて問題になるが、何より頼朝挙兵直後、信濃国人が頼朝に呼応し、城四郎と戦つたとする事は他書に見えず、認め難い。

これは『吾妻鏡』が取り入れた村山氏の勲功伝承に基づく記事ではないか。村山義直は延慶本『平家』三末「志雄山合戦事」に「海野・望月・仁科・村山」と挙げられ、寿永二年夏の北陸合戦では木曾に従軍した可能性があるが、その後は見えず、『吾妻鏡』では建久元年十一月十一日条頼朝の六条若宮・石清水八幡社参の後陣隨兵に、同六

年五月二十日条の頼朝天王寺詣、建久八年の頼朝の善光寺参詣にも後陣隨兵として、有力御家人及び源氏一門と共に随従し、その序列からすると源氏一門としての待遇を受けた事が分かる。『尊卑』では、



と、鎌倉時代迄の系譜がある。<sup>(28)</sup>

この『尊卑』の義直の協書が注目されよう。義直が石橋山合戦の際、幡の文を頼朝より授かつたと解されるからである。<sup>(29)</sup> 義直の参陣自体『吾妻鏡』や『平家』に見えないが、<sup>(30)</sup> 同様の伝承が『太平記』巻九「足利殿着御篠村則国人馳参事」には、久下氏の勲功として挙げられる。

彼が先祖、武蔵ノ国ノ住人久下二郎重光、頼朝大將殿、土肥ノ杉山ニテ御旗ヲ被レ揚テ候ケル時、一番ニ馳参ジテ候ケルヲ、大將殿御感候テ、若我天下ヲ持タバ、一番ニ恩賞ヲ可レ行ト被レ仰テ、自一番ト云文字ヲ書テタビ候ケルヲ、頼其家ノ文ト成テ候（日本古典文学大系）

とあるから、同様、<sup>(31)</sup> 『尊卑』の村山氏の紋の由来も一番の参陣であつたとする解するものである。<sup>(32)</sup>

村山氏にも義直が頼朝の元に真先に参じたとの勲功伝承があつたのであり、『吾妻鏡』④の記事もその影響を受けるのではないか。①は頼朝への忠節では無く、義仲挙兵への呼応である点異なるが、時期が一致する事、この時点で城四郎が登場する点共通するからである。以上からすると、少なく共『吾妻鏡』の①の義仲挙兵の時期はそのま

ま史実とする事は無理であると筆者は考へる。

さうすると木曾の挙兵時期について記した記録は『吾妻鏡』②で、十月十三日以前となる。これは四部合戦状本『平家』よりも一月早い。②の前半の義仲出自は『平家』の影響を想定するとしても、後半の足利俊綱の支配に対抗したとある記事は物語に見えず、『吾妻鏡』九月三十日条に、

足利太郎俊綱為平家方人、焼払同国府中民居、是属源家輩令居住之故也

とある足利俊綱の乱妨に相応する。現在の所、②・③を他の史料より確認出来ないが、同時に否定する論拠も目下ない。城四郎が治承四年、白河荘で兵糧米を徴集したとある文書も信濃の反乱が治承四年である事を裏付け、義仲を含む可能性を否定出来ないから、その挙兵は今の所、治承四年十月以降とせざるを得ないだらう。<sup>(34)</sup>

#### 四、義仲の信濃経略

『玉葉』治承四年十二月十二日条によれば積雪の為、城太郎の信濃攻略は延期されるとあるが、義仲が信濃経略に徒手してゐた訳ではない事は、蓬左文庫蔵金沢文庫本『斉民要術』卷十紙背文書「笠原信親所帯証文目録」<sup>(35)</sup>を見るに、

証文目録

木曾殿御下文 治承五年四月十五日

「次郎行連絡之

とあり、神信親の先祖に「南笠原内田上村」の知行を認めたとある事

から、翌治承五年四月には、少なく共東信で勢力を拡げた事が確認される。注目すべきは「笠原」の地名である。信濃には笠原牧が伊那郡と高井郡（中野市）の二箇所あり、南笠原とあるのは後地である。<sup>(36)</sup>

笠原頼直の名字の地は厳密に云つて南北どちらか未確認であるが『長野県史』四十六頁は、先の宇治川合戦に共に参戦した吉田安藤・常葉江が北信の武者である事から、また武久堅氏も対戦相手の村山氏の本拠地の所在から同様後地に比定する。<sup>(37)</sup>さうすると木曾が笠原牧の一部を安堵した四月十五日は、笠原頼直が「有微忠」（『吉記』四月十日条）と平家に賞された日と近似する事になる。

郷道哲章氏は先の『吉記』の頼直の「微忠」を、『吾妻鏡』の村山義直との戦ひと解したが、これは木曾と笠原頼直の合戦が四月初旬頃で、義仲は勝利の結果、信親に笠原牧の一部を安堵し、一方で敗北したものの、頼直に平家が恩賞を与へたと解する事が出来るのではないか。更に延慶本他の『平家』に依れば、笠原頼直は越後に逃亡し、城家の当主城四郎<sup>(38)</sup>を頼り、六月の横田河原合戦に参加したとあるが、寧ろ直前のこの四月の敗北を受けたと解すべきであらう。先の『吾妻鏡』①の市原合戦が時期的に早すぎて、村山氏の勲功伝承に曳かれたと推定したが、この合戦を含めて義仲の軍事行動が翌年春に活発化し、城氏が応じたのが横田河原合戦であつたと筆者には思はれる。

それではその時までには、義仲が信濃を掌握した事になるか。『平家』では義仲の挙兵後、根井行親の呼びかけに応じ、

信濃一國の兵もの共、なびかぬ草木もなかりけり、上野國に故帯刀先生義賢がよしみにて、田子の郡の兵共、皆したがひつきにけり（卷六「廻文」）



とする。養和元年六月の横田河原合戦でも『平家』では、義仲が信濃・西上野の武士を率ゐて戦つたとし、『吾妻鏡』でも、

越後住人城四郎永用、相繼兄資元〔当国守〕之跡、欲奉射源家、仍今日、木曾冠者義仲引率北陸道軍士等、於信濃国筑磨河辺合戦、及晩永用敗走云々〔寿永元年十月九日条〕

と年時を誤り、北陸道軍士が参戦したとするのも問題だが、義仲主導とする点では同じ。『吾妻鏡』寿永元年十月九日条では義仲が北陸道の武士を指揮したとあるが、この時点で信濃を掌握したと見られない事は、

兼光相語云、越後国勇士〔城太郎助永弟助職、国人号白川御館〕欲追討信濃国〔依故禅門・前幕下等命也〕〔中略〕信乃源氏等分三手〔キノ党一手、サコ党一手、甲斐国武田之党一手〕俄作時攻襲之間、疲嶮岨之旅軍等、不及射一矢、散々敗乱了、大將軍助職、而三所被疵、脱甲胄棄弓箭、僅相率三百余人、〔元勢万余騎云々〕逃脱本国了、残九千人、或被伐取、或落自嶮岨終命、或交山林暗跡、凡無再可戰之力云々、然間本国在庁官人已下、為遂宿意、欲陵礫助元之間、欲引籠藍津<sup>アイツ</sup>之城之处、秀平遣郎從欲押領、仍逃去佐渡国了、其時所相伴纔四五十人云々、是事前治部卿光隆卿〔知行越後国之人也〕、今日称慥説、於院所相語也云々〔玉葉〕養和元年七月一日条

とある記事からすれば、城方の大軍を奇襲で敗つた点で、『平家』と共通するが、「キノ党」が義仲としても諸勢力の連合と解されるからである。<sup>(4)</sup>『皇代曆』安徳紀養和元年条にも、

同六月比云々越後国白川四郎助職為大將軍、遣信乃国之間、為木

曾冠者<sup>故源義賢子</sup>、二斜二郎等被打落助職、纔<sup>ニ</sup>存命逃帰了、仍越後国以南諸国至越前能登等、皆木曾冠者等押領畢

とあり、城四郎を打ち破つた武將として義仲と共に波線の仁科二郎盛家が挙げられるのである（現存『平家』に仁科二郎の参戦記事なし）。仁科盛家は義仲の同盟軍的武將である事を見るに、義仲単独と云ふよりは信濃武士との連合と解して良いだらう。義仲はこれを強固な主従関係へと発展出来なかつたのであるが、城氏の敗北により、義仲は越後から北陸道に向けて支配領域を拡大する事になる事は確かである。

## 五、義仲の北陸進出の過程について

覚一本『平家』では横田河原合戦後、城四郎が越後に逃亡したとすただけだが、延慶本（・長門本・『盛衰記』）では、

木曾、横田ノ師ニ切懸頸共五百人也、即城四郎跡目ニ付、越後苐ニ付タレハ、国<sup>者</sup>共皆源氏ニ順ニケリ、城四郎安堵シ難カリケレハ、会津<sup>ハ</sup>落ニケリ、北陸道七ヶ国ノ兵共、皆木曾ニ付テ、從輩誰々ソ、（越前・加賀・能登・越中の武士交名）此等牒状ヲ遣シテ、木曾殿コッ城四郎追落テ、越後苐ニ付テ、責上テ御スナレ、イサヤ、志アル様ニテ、被召ヌサキニ参ラム、ト云ケレハ、子細ナシトテ、打連参ケレハ、木曾悦<sup>テ</sup>信乃馬一疋ツ、ソタヒタリケル、サテコソ五万余騎<sup>ニハ</sup>成ニケレ、定<sup>テ</sup>平家ノ討手下ラムスラム、京近<sup>キ</sup>越前国火打城ヲコシラヘテ籠候ヘト下知シ置テ、吾身ハ信乃ヘ帰<sup>テ</sup>横田城ニッ居住シニケル（延慶本三本「城四郎与木曾」合戦事）

と、義仲が追跡した為、城四郎は越後を脱出し、義仲が国府を掌握し

たとする。更にそれを見て北陸道の武士が源平孰れに荷担するか評定した後、越後に参州し、義仲は越後に居ながら、北陸道を掌握したとする。四部本も簡略であるが、

長茂単孤無来逃返ル越後国へ、義仲尋跡責問、北陸道兵皆随義仲、長茂交山野不安堵セ、告ケレ、平家亦騒キ

とあり、内容的に大差ない。対して屋代本『平家』では寿永二年三月、義仲と頼朝の戦闘が回避された後、

木曾驍<sup>テ</sup>越後へ打越<sup>テ</sup>城ノ四郎ト合戦ス、如何<sup>ニモ</sup>シテ討取ントシケレトモ、長持主<sup>シ</sup>従<sup>シ</sup>五騎ニ打ナサレ、行方不<sup>レ</sup>知ソ落テケル、越後国ヲ始<sup>テ</sup>北陸道ノ兵共、皆木曾ニ随付ク、東山<sup>ゼン</sup>北陸両道ヲ討随ヘテ、只今都ヘ可<sup>シ</sup>攻入トソ聞ヘケル<sup>(45)</sup>

とし、城四郎の没落と義仲の北陸道掌握をこの時点とする。これによれば、義仲の北陸進出は寿永二年三月以降となる。『玉葉』の記事では前掲の通り、城四郎が越後に逃亡した後、国衙の官人が城氏に反抗し、四郎が逃亡したとあるが、義仲の越後進出には言及がなく、七月二十二日条の風聞では、

人伝云、越後城助職未死、勢又強不減、信乃源氏等雖似掠領、未入部云々

とあり、信濃源氏の進出が滞つてゐるとする<sup>(46)</sup>。

しかし浅香氏著一七二頁が指摘するが、尊経閣文庫所蔵「関東下知状」<sup>(47)</sup>に、

貞直者、自領家補任下司職由事、平家以往者不及陳答、木曾左馬頭成給安堵下文之後、為関東御家人、(中略)而定朝等所進留守所治承五年八月・木曾左馬頭同六年二月下文者、以定直可為弘瀬

村下司職云々

と、円宗寺領越中石黒莊弘瀬郷を木曾義仲が安堵する事から、治承六年(寿永元年)二月の段階では、越中に支配権を及ぼした事が分かり(浅香氏著一七二頁)、石川県立図書館蔵『雜録追加』卷七所収「木曾義仲下文写」(『加能史料 平安四』)が正しいとすると、治承五年十一月の段階で、能登にまで及んだ事となり、横田河原合戦後、義仲が城氏の退潮に合はせて北陸に進出した事は事実で、屋代本以外の『平家』は、その点、正しい。

また義仲の越後の掌握が寿永二年三月以前である事は、『皇代暦』裏書よりも確認出来る。既に指摘したが、寿永二年三月、頼朝の信濃侵攻に際し、一旦、義仲が越後に逃亡したとあり、当時既に城氏の妨害を排除出来てゐた事になるのである。河内祥輔氏は横田河原合戦後、義仲が越後に押し出されたと推定するが、それはこの義仲と頼朝の軋轢以降と見るべきである<sup>(48)</sup>。

只、『平家』で、横田河原合戦以降、越前以北の北陸武士が義仲に帰伏したとする記述に関しては、先に浅香氏論を紹介した様に、治承四年の越前での反平家蜂起は義仲とは無関係で、正確ではないとした。確かに年代記『一代要記』には、

六月比、以越後国白河四郎助職、為大將軍遣信濃国之处、為木曾冠者二斜二郎等被打落、助職僅存命逃帰了、北国皆木曾押領之<sup>(49)</sup>と、『平家』と同様、義仲の北国掌握の記述があるが、『一代要記』よりも古態の『皇代暦』の前掲近似本文では、傍線が「木曾等」とあり、必ずしも義仲一人、且つ直後の北陸掌握とはなつてゐないからである。『平家』が此処で『皇代暦』(の典拠)を利用し、問題の北陸掌握本文

を作成したか、断定出来ないが、或は典拠を誤解したとしても、『平家』では、北陸武士の帰参を描く等（延慶本・『盛衰記』）、義仲の漸進的な勢力伸張を、劇的に描いたと推定出来る。

## 六、義仲と北陸宮

義仲の北陸経略を考へる上で、看過出来ないのが北陸宮との関係である。周知の通り、寿永二年八月、安徳天皇を擁し平家が西国に落ちた後、後白河院は次の皇位に、高倉院の四宮（後鳥羽天皇）を立てようとするが、そこに義仲が異論を挟み、以仁王遺児の北陸宮を強硬に推したからである。『玉葉』によれば、義仲は平家打倒の功績は高倉宮にあるとし、麾下の武士の総意として宮を推してゐるが（寿永二年八月十四日条）、院の意向に同宮は無く（『たまきはる』<sup>④</sup>）、北陸の宮は御占で三宮の次の第三位で、「始終不快」（『玉葉』同十八日条）として退けられた為、義仲が激怒したと伝へる（同二十日条）。

所が『平家物語』に於いては、延慶本四「平家一類百八十余人解官セラル、事」に

義仲、高倉宮ノ御子即位事、内々泰経卿ニ申旨アリケレハとして、以下『玉葉』記事と同趣旨の義仲の申し入れが載るが、前後に対応記事はない。他の『平家』伝本にも宮推戴は無く、皇位選定の候補者は三宮と四宮のみとされ、院に懐いた四宮が占の結果とも併せて選ばれたとだけである。これは『愚管抄』巻五にある記述の、ソノ御中二三宮・四宮ナルヲ法皇ヨビマイラセテ見マイラセラレケルニ、四宮御ヲモギライモナクヨビヲハシマシケリ、又御ウラ

ニモヨクオワシマシケレバ、四宮ヲ寿永二年八月廿日御受禪ヲコナハレニケリ

に近く、北陸宮の割り込みを省いたのは『平家』以前の資料にあつた可能性があるが、延慶本は前後の脈絡を無視して歴史的資料を取り込んだもので、現存『平家』諸本を見る限り、本来言及が無かつたと判断される。但し覚一本『平家』では、

又奈良にも一所在ましけり、御めのと讃岐守重秀が御出家せさせ奉り、ぐしまいらせて北国へ落くだりたりしを、木曾義仲上洛の時、主にしまいらせんとてぐし奉て宮こへのほり、御元服せさせまいらせたりしかば、木曾が宮とも申しけり、又還俗の宮とも申しけり、後には嵯峨のへん野依にわたらせ給しかば、野依の宮とも申しけり（巻五「通乗之沙汰」）

とあり、上洛の際、義仲が宮を天皇とすべく伴ひ、入京後、還俗させたと読む事が出来る。

しかし他の諸本は当該本文が異なる。屋代本は当該巻を欠くのであるが、文禄本（中院本）を見るに、端的に傍線部が無く、北陸に於いて木曾が主君と奉戴したとあるだけである。四部本では、

復一人ハ高倉宮ノ御乳母子ニ讃岐ノ前司重秀ヲ奉レ具シ、云ニ越中宮崎ト云処ニ、立ニ御所ニテ、奉レ居、元服シ進ラセテ、申ニス木曾ノ宮トモ、亦ハ還俗ノ宮トモ（巻四）

とあり、延慶本では、

猶御子ハヲワシマスト聞ユ、一人ハ高倉宮ノ御乳母ノ夫、讃岐前司重季奉具ニテ、北国へ落下給ヘリシヲハ、木曾モテナシ奉テ、越中国宮崎ト云所ニ、御所ヲ立テ居奉リツ、御元服アリケレハ、

木曾ノ宮トソ申ケル、又ハ還俗ノ宮トモ申ケリ（二）中「高倉宮ノ御子達事」

とあり、『盛衰記』・『頼政記』<sup>⑤</sup>にも波線部があり、四部本が延慶本の波線部を欠くのは脱落と考へられるが、木曾が越中で宮を保護したとだけある。

これは文禄本の如き主君とするとの表現とも異なるのであるが、北陸宮即位の先例についての平家の批評記事でも、諸本義仲が宮を上洛に伴なつたとするだけで、皇位推戴については言及がないから（東寺執行本・中院本には当該段なし）、覚一本のみが特殊で、端的に史実を参照した可能性があるが、後の改変として良いだらう。

北陸宮の伝記自体不明点が多く、果たして本物が疑問視する水原一氏<sup>⑥</sup>、或は宮廷にさういふ風潮のあつたとする村上學氏<sup>⑦</sup>の見解があり、『平家』の如く北陸の宮と還俗の宮を同一人として良いか、『玉葉』に北陸宮の出家について言及の無い事、『明月記』寛喜二年七月十一日条の、

心寂房来、去八日、嵯峨称孫王之人（世称還俗宮）逝世（数月赤痢、年六十六）、以仁皇子之一男云々、治承宇治合戦之比、為遁時之急難、剃頭下向東国、為俗体而入洛、建久・正治之比、雖望源氏不許、老後住嵯峨、以宗家卿女為妻（於心操者落居之人歟）、養申土御門院皇女、讓一所之領云々<sup>⑧</sup>

に見える嵯峨の孫王が、北陸ではなく東国に逃れたとある事から、疑問の余地があるとする櫻井陽子氏の説がある<sup>⑨</sup>。

北陸宮と嵯峨孫王との関係については、確かに不審があり、今後の史料の出現を待つしかないが、義仲と北陸宮との関係に疑問点がある。

宮の謀叛発覚後、平家は八条院女房所生の宮の身柄を確保し、仏門に入れる事<sup>⑩</sup>で処分を解決した如くであるが、別に宮の遺児蜂起の風説があつた。

伝聞、吉野大衆等蜂起、有称宮之子之人云々、仍自院被仰奈良大衆可尋出件小宮之由云々（『玉葉』養和元年五月六日条）

とあり、『平家』で奈良に居たとする北陸宮との関係が問題となるが、続報が無い為、真偽不明である。また『盛衰記』には、養和二年（寿永元年）の記事に、

五月十九日、藏人左少弁光長宣旨ヲ奉テ、叡山ノ惡徒永雲、薩摩国ニ配流、顯真ハ土佐国ヘソ被遣ケル、是ハ高倉宮ノ御子并ニ伊豆守仲綱カ子息ヲ木曾義仲カ許ヘ下シ奉リケル罪科トソ聞エケル（卷二十八「顯真一万部法華經」）

と、以仁王遺児が叡山の悪僧の援助で北陸に下つたとあるが、他の記録に確認出来ない。確実と思はれるのは、同年七月末に、

全玄僧正来、大将訪也、語云、前幕下年来所召仕之侍、両三人、引率逃去東国、奉具三条宮子宮云々、而於路頭、皆悉被擲留了云々、又或人云、讃岐前司重季向北陸道了、事若実者不能左右事也（『玉葉』寿永元年七月二十九日条）

また、

伝聞、讃岐前司重季決定入越前国了云々、故宮子若宮、一定奉相具云々（同八月十一日条）

とある様に、七月末の逃亡が正しく、『吉記』同二十八日条には、伝聞、前馬允行光（三条宮侍専一者也）・前滝口（不知実名、馬大夫式成男、重衡卿侍）・上野国住人奈越太郎家澄等（当時祇候



前大将許)、都盧五十人許者、廿三日出京赴坂東、於近江国高島無成被擱留、或又逃下云々

とあり、高倉宮の家人、東国武士が伴なつてゐたとする。琵琶湖西岸の高島で捕縛されたとあるから、行き先が東国か北国か判然としないが、この時、以仁王皇子が二人同行してゐた、或は偶々東国と北国の二つの逃亡者が重なつたとは考へられないから、この一向に北陸宮がをり、重季と共に無事に北陸に逃れたと見てよい。竜華越をしたと見れば『盛衰記』の記事はこの事件と関係するか。

その後、前掲の如く一部『平家』伝本では義仲が越中宮崎に御所を構へたとあるが、不審点は、『玉葉』では「加賀宮」(寿永二年八月二十日条)・「北陸宮<sup>加賀</sup>明日可有入洛」(九月十九日条)とある事で、少なく共寿永二年の入京当時、宮の滞在地は加賀であつたと見られるのである。これは御所の移動、或はその時点での都の呼称と説明可能であるが、寿永元年には既に越中に支配権を拡げてきた<sup>(38)</sup>とは言へ、自身、越中に進出した形跡が確認出来ない義仲が、本拠地の信濃または隣接の越後に宮を擁せず、遠隔地の加賀または越中に御所を据ゑた理由が不明である。

同地を名字とする武士、宮崎太郎は一部の『平家』で寿永元年に義仲が城四郎を駆逐し、越後に入つた際、配下となつた北陸武士の交名に見える(延慶本・長門本・『盛衰記』)。特に長門本卷十三に、寿永二年の火打城合戦や砺波山の案内等、一族共、木曾側として活躍が記される武士であるから、義仲が宮を委ねたと見て、水原一氏の通り、北陸での両者の関係について密接であつたと考へてよい<sup>(40)</sup>。

然るに河内祥輔氏は義仲が前代未聞の京攻めを敢行出来た理由とし

て、北陸宮の擁立を挙げ、寿永二年五月頃、加賀で義仲が宮と接触した事がその転機となつたと推定する<sup>(41)</sup>。筆者も義仲が宮の存在を入京以前の北陸経略の大義名分として利用した形跡、或は端的に両者の交渉の事実が現在の所、確認出来ない事から、北陸宮は直接義仲の庇護下に無かつたとする氏の見解に賛成である。

更に北陸宮を上洛時に伴なつてゐない点、九月の宮の上洛が後白河院の招請によるもので『百鍊抄』九月十八日条、十一月の法住寺合戦の際まで、院と同宿し、合戦直前に逐電したとある(『吉記』十一月十八日条)。在京中、義仲と没交渉な点、特に合戦後、義仲の庇護を承けた形跡が無い事からして、宮の入京後、両者の関係が冷却化したと説明せざるを得ないが、寧ろ当初より両者が密接に結びついてゐたものではない事を示すのではないか。既に北陸武士の中には義仲を離反したものも居り、係累を避ける目的で、姿を晦ましたのであらう。逃亡後の宮の消息は不明であるが、文治元年に頼朝の後援で、

伝聞、三条宮息年来被座北陸之宮(生年十九、雖加元服、未有名字)一昨日入洛、頼朝之沙汰云々(『玉葉』文治元年十一月十四日条)とあるのは、宮が寿永二年以降も北陸に隠退してゐたと解され、或はそこが宮崎であつた可能性がある<sup>(42)</sup>。

義仲が宮を再推戴しなかつた事は、入京時の強硬姿勢を考へると不思議で、果たして上洛時に宮推戴の確固たる政治的意志があつたか不審である。筆者は「自然源氏来近江」(『皇代曆』裏書)とある様に、義仲達源氏連合軍は敗れた平家を追つて越後から進軍し、上洛に至つたもので、宮の推戴も場当たりであつたと見るものである。



# おはりに

史実の木曾義仲の政治的・軍事的意義について否定するものではないが、『平家』に曳かれて義仲の勢威について、過大な評価をしすぎていると思ふものである。前稿では頼朝との軍事的実力の非対称性について指摘したが、本稿では挙兵と信濃・北陸経略の実態について、『平家』・『吾妻鏡』を批判的に検討した。

## 注

- (1) 諸源氏の参戦時期と経緯については拙稿「日本国ふたりの將軍といはればやー『平家物語』の義仲と頼朝ー」(『米沢史学』三十一、平成二十七年十月)。
- (2) 一志茂樹氏「木曾義仲挙兵の基地としての東信地方」(『千曲』一、二号、昭和四十九年四月)・菱沼一憲氏「中世地域社会と將軍権力」(『木曾義仲の挙兵と東信濃・西上野地域社会』(平成二十三年六月、初出平成十二年)・村田正行氏「治承・寿永の内乱における木曾義仲・信濃武士と地域間のネットワーク」(長野県立歴史館『研究紀要』十六、平成二十二年三月)。
- (3) 『治承・寿永の内乱論序説』(昭和五十六年十二月)。以下浅香氏著とし、その頁数を挙げる。
- (4) 後掲の『尊卑分脈』・『百鍊抄』ともに新訂増補国史大系による。
- (5) 治承四年十二月までの記事を持つ『源平闘諍録』巻五に義仲の挙兵記事が無い事も、同様翌年正月とするか。『源平闘諍録』は汲古書院の影印。その他の主要な異本は、延慶本・四部合戦状本・南都本は汲古書院の影印、長門本は福武書店の翻刻、『源平盛衰記』(以下『盛衰記』)は勉誠社の慶長古活字本の影印による。必要に応じ蓬左文庫本をも参照(汲古書院の影印)。覚一本は日本古典文学大系の翻刻、屋代本は貴重古典籍叢刊の影印による。
- (6) 佐伯真一氏『平家物語遡源』第二部第九章「保暦間記」と四部本・盛衰記共通祖本の想定」(平成八年九月、初出は同七年六月)。
- (7) 早川厚一・佐伯真一・生方貴重氏『四部合戦状本平家物語評釈(九)巻五後半』(平成八年十二月)。
- (8) 『延慶本平家物語考証』一所収の謄写本の影印による。
- (9) 福田晃氏『曾我物語の成立』第五編第二章「平家物語と曾我物語ー頼朝蜂起説話における伝承関係」(平成十四年八月、昭和四十一年三月)。
- (10) 勉誠社の『真名本 曾我物語』の影印による。
- (11) 『剣巻』も宮の令旨により挙兵したとするが、時期は明記なし。『剣巻』の田中本は高橋貞一氏「田中本平家剣巻解説」(『国語国文』三十六ノ七、昭和四十二年七月)に、長禄本は完訳日本の古典『平家物語』四による。
- (12) 『玉葉』寿永二年八月十四日条に義仲が「故三条宮御息宮在北陸、義兵之勲功在彼宮御力」として、次期天皇位を北陸宮に推したとする。傍線は以仁王を指すと考へられる。ことと関連する延慶本『平家』四「平家一類百八十余人解官<sup>セラル</sup>、事」では、「彼親王ノ宣ヲモテ源氏等義兵ヲアケテ」とする。
- (13) 丸山二郎氏「以仁王令旨を読む」(『日本歴史』六十八、昭和二十九年一月)。

- (14) 平泉隆房氏「以仁王令旨考」(『皇學館論叢』十三ノ三、昭和五十五年六月)・羽下徳彦氏「以仁王〈令旨〉試考」(『豊田武先生古希記念会編』『日本中世の政治と文化』〔昭和五十五年六月〕所収、後に『中世日本の政治と史料』〔平成七年五月〕所収)・安藤淑江氏「延慶本『平家物語』の資料受容の側面」(『中世文学』三十、昭和六十年五月)。河内祥輔氏「日本中世の朝廷・幕府体制」(『以仁王事件について』〔平成十九年六月〕)
- (15) 注(1)の拙稿参照のこと。
- (16) 『長野県史 通史編 第二卷中世一』(以下、『長野県史』と略)では市原は現在の長野市市村かとされるが、以下、市原合戦とする
- (17) 武久堅氏『平家物語・木曾義仲の光芒』第一章「義仲と乳兄弟の物語を紡ぐ原点―母親の「託孤」と兼遠一族の「野望」―」(平成二十四年二月、初出は平成十四年)
- (18) 頼朝の上野掌握と関連する足利俊綱・忠綱の没落時期に関しては、須藤聡氏「下野姓足利一族と清和源氏」(田中大喜氏編『下野足利氏』平成二十五年十月)参照のこと。
- (19) 注(2)諸論参照のこと。
- (20) 國學院大学網頁公開の「宮本直一博士写真資料」に拠る。
- (21) 五味文彦・本郷和人氏編『現代語訳 吾妻鏡 一 頼朝の挙兵』一三六頁(平成十九年十二月)では、範覚に対して「?―一二〇五(?!―元久二)。藤原能兼の男。母は高階季時の娘。栗田寺の別当」とするが如何。
- (22) 大島奥津嶋神社文書断簡(中村直勝氏「平家物語の断簡」〔『藝文』十三ノ四、大正十一年四月)も同。
- (23) 平泉佐由子氏「延慶本『平家物語』横田河原合戦記事における笠原平五頼直の活躍―伊那の源平の攻防を背景として―」(『日本文藝研究』五十五、平成十五年十二月)
- (24) 東大史料編纂所の網頁公開に拠る。
- (25) 勉誠社文庫の内閣文庫本の影印に拠る。
- (26) 武田信義が甲斐を掌握したとの風聞は、『山槐記』治承四年九月七日条に見える(増補史料大成)。諏方上社の神氏の一族千野七郎は『平家』巻九「樋口被討討」によれば一条次郎の陣中にゐたとされる。
- (27) 『大日本古文書 相良家文書之一』(『源頼朝善光寺参詣随兵日記』)
- (28) 穂久邇本『曾我物語』巻九に信濃武士として「よなもち」が挙げられ(日本古典文学影印叢刊、武田乙本〔電子公開〕同)、『諏訪御符札之古書』では、御射山祭の頭役として、長祿二年「米持滝芳丸」、寛正五年「米持滝房丸」、文明十年、十六年「米持安芸守貞満(満貞)」が見える(『新編信濃史料叢書』一)。
- (29) 北酒出本『源氏系図』の義直協書には見えない(拙稿「信濃井上氏の成立と展開」〔『山形県立米沢女子短期大学紀要』四十二、平成十九年一月〕に当該部翻刻)。『上杉文書』所収「村山系図」(雄松堂のフィルムによる)は『吾妻鏡』を引く。
- (30) 沼田頼輔氏『日本紋章学』「一番紋」(昭和四十三年三月)
- (31) 『久下文書』「久下政光遺言状案文」(『兵庫県史 史料編 中世三』・「久下系図」〔『新編埼玉県史別編四』〕にも見える。同様、歴史的に未確認であるが、少弐氏の先祖頼平は「源頼朝卿挙義兵軍干武州時最前馳参」と『横岳系図』(東大史料編纂所の謄写本)にある。

- (32) 將軍より紋を賜つたとする中世の武家家伝は、『吾妻鏡』文治五年七月二十六日条・『源威集』に佐竹秀義が頼朝より、禪通寺本『渡辺党系図』甲本に、源授が頼朝より授かつたと見える。又『三浦和田中条氏文書』一三一六「中条秀叟記録」(享徳三年四月、『新潟県史 資料編四 中世二』所収)に中条氏が足利尊氏より賜つたとする例、『横岳系図』に後三年の役の際、義家より紋を賜つたとする例を挙げる事が出来る。
- (33) 『九条文書』『越後国白河莊作田注文案』(建久八年五月、『鎌倉遺文』八〇〇一)
- (34) 『市河文書』「源某下文」(『新編信濃史料叢書』三)の源某が義仲であるとする、義仲の挙兵は、藤原資弘に所領を安堵した治承四年十一月以前となるが、この推定と背馳しない
- (35) 『鎌倉遺文』一〇八三六(文永八年五月)
- (36) 『吾妻鏡』文治二年三月十二日条所収の注進状には「笠原御牧」と「笠原牧南条・同北条」とされる。
- (37) 『平家物語・木曾義仲の光芒』第二章「横田河原合戦」の義仲造形(初出平成十三年三月)
- (38) 「鎌倉幕府による信濃国支配の過程について(一)——信濃国における將軍家知行国の意義——」(『信濃』二十五ノ十一、昭和四十八年十一月)
- (39) 城太郎は養和元年春に死去(『玉葉』同三月十七日条・同二十一日条、『吉記』治承五年六月二十七日条)。
- (40) 塚田正朋氏『長野県の歴史』七十三頁(昭和四十九年五月)
- (41) 『吉記』寿永二年七月三十日条(延慶本三末「京中警固ノ事義仲注申事」にも見える)の京都警備分担交名を見るに、他の源氏一門と同列であり、法住寺合戦後、解官されてゐる事(『吉記』同十二月三日条)から、法住寺合戦前に義仲と訣別したと思はれる(浅香氏論二三九―二四〇頁)。
- (42) 平松本(清文堂の影印)・竹柏園本(天理善本叢書)・鎌倉本(汲古書院)同。百二十句本・小城鍋島本(以上汲古書院の影印)・文禄本卷七(日本古典文学会の複製)・中院本(『校訂中院本平家物語』の翻刻)では、「其後、木曾ハ越後国ヘ打越テ城ノ四郎ト合戦ス、城四郎戦負テ、出羽国境ヘ引退ク、木曾ハ東山北陸両道ヲ打随テ、既ニ都ヘ責上ルトソ聞ヘケル」(文禄本)と、小異がある。
- (43) 『吾妻鏡』寿永元年九月二十八日条に、越後住人城四郎永用於越後国小河庄赤谷、構城郭、剩奉崇妙見大菩薩、奉咒詛源家之由有其聞とあり、依然、城四郎が抵抗する如くだが、続く十月九日条が養和元年の横田河原合戦を時期的に誤つたものであるから、記事内容を寿永元年の事としたい。
- (44) 『鎌倉遺文』八七七五(弘長二年三月)
- (45) 長村祥知氏「木曾義仲——反乱軍としての成長と官軍への転換」(野口実氏編『治承・文治の内乱と鎌倉幕府の成立』所収、平成二十六年六月)
- (46) 注(1)拙稿及び拙稿「平家物語『頼朝義仲不和』の成立について」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』二十五、平成十年三月)。
- (47) 『頼朝の時代 一一八〇年代内乱史』「京攻めの条件」六一頁(平

成二年四月)

(48) 東山御文庫本の紙焼写真による。

(49) 注(1) 拙稿参照のこと。

(50) 新日本古典文学大系に拠る。

(51) 松尾葦江氏『軍記物語論究』の翻刻による。『頼政記』には延慶本の二重線部がないが、是が古態か判断不明。

(52) 早川厚一・佐伯真一・生方貴重氏「四部合戦状本平家物語評釈(七)」二二三頁(昭和六十二年十二月)

(53) 『延慶本平家物語論考』「以仁王生存説をめぐって」(昭和五十四年六月)

(54) 「傍系人物三人―消滅した背後説話―」(説話と説話文学の会編『説話論集』二三所収、平成四年四月)

(55) 『大日本史料』五之五、同七月八日条所引による。

(56) 『平家物語』本文考』「北陸宮と嵯峨孫王」(平成二十五年二月、初出は平成十三年七月)。氏は『平家』が八条院女房所生の宮の遺児道性を別の道尊と過つてゐる事を明らかにした(『平家物語の形成と受容』第一部第二章「以仁王の遺児の行方―道尊、道性、そして姫宮」(平成十三年二月、初出平成九年六月)。

(57) 『山槐記』・『玉葉』治承四年五月十六日条。

(58) 尊経閣文庫所蔵「関東下知状」『鎌倉遺文』八七七五(弘長二年三月)、浅香氏著一七二頁。

(59) 行俊本(所謂「長門切」、松尾葦江氏『軍記物語論究』所収)・蓬左文庫本『源平盛衰記』では、横田河原合戦の勝利の後、義仲は「木曾は関の山をかためさせて暫く<sup>①</sup>越中の国府にやすらひけり(越

前・越中・加賀武士評定)木曾殿平家追討の為に越中国府に御坐なり」(行俊本、『盛衰記』巻二十七は傍線部を「関山」とする)と、

越中迄進出したとする。但し古活字本『盛衰記』では波線部①を「越後」とし、延慶本・長門本でも越中ではなく、越後とし、蓬左文庫本『盛衰記』でも「資永ハ四万よきを相くして、今日ハ越後国府につく、明日ハ当国としなのとのさかひなる関の山をこえんとす」(巻

二十七「信乃横田原軍」とあり、関山は越後と信濃との国堺であるから(延慶本三末「兵衛佐与木曾不和成事」・「遊行上人縁起」(『日本絵巻物全集』二十三)、傍線は越後が相応しい。行俊本『盛衰記』がそれを越中に誤つたか、改変したと考へられる。

(60) 「歴史の中の本曾義仲―延慶本平家物語の史実度に触れて」(同氏編『延慶本平家物語考証二』、平成五年六月)

(61) 注(47) 著九〇頁。

(62) 水原一氏が指摘する様に(『平家物語の形成』「巴の伝説・説話」昭和四十六年五月)、義仲主従に関連する伝承が残る地である。即ち妙本寺本『曾我物語』巻五では、建久四年、義仲配下だった海野幸氏が頼朝より宮崎を賜つたとあり、『源平盛衰記』巻三十五「巴関東下向」では巴は越中の石黒太郎を頼つたとある。巴は今井兼平の女ともされ(『源平闘諍録』、『盛衰記』巻二十九「俱利伽羅山」では中原兼遠女)、『尊卑分脈』では清水冠者の母が兼平女とある事からすると、室町物語の『清水冠者物語』で、清水冠者の「母うへは越中の国みやさきといふ所にまします也」(国会図書館本(「室町時代文学資料集『室町期物語』(二)」、北海道大学図書館本(「室町時代物語大成」四)・慶応大本(「同」六)も同)と一連の伝承と思はれ

る。砂川博氏は宮崎一族の伝承が『平家』の取り入れられたとするが、『平家物語新考』第二章第一節「延慶本平家物語の「俱利伽羅落」の生成（昭和五十七年十二月、初出昭和五十年七月）」、それが宮崎に於ける義仲の宮の庇護説を生んだ可能性も考慮されるか。



